

収蔵品の写真撮影について

Mプロジェクト 長崎純義

1.はじめに

私たちが行っている収蔵品の写真撮影について述べます。

私たちも、スタジオ撮影は初めてで、暗中模索の中で学んできました。プロのカメラマンから見たら幼稚かもしれませんが、商業写真やポスターなどを作るわけではなく記録として残すものですから、今のところこのような方法で充分だと思います。参考にしてください。(規格等は目安です。)

2.機材

(1) デジタルカメラ

600万画素以上、入門機一眼レフ程度で、レンズ径が大きいもの、5倍以上の高倍率のズーム、電源はACアダプターを使用。

レンズ径が大きく、高倍率ズームの中級機以上の固定レンズタイプでも可。

(当館使用機 当初 カシオQV-3500EX、ソニーDSC-F717、現在 ソニーDSC-F828)



(2) 三脚

最高丈200cm程度のもの。(とりあえずは、丈夫なものであればこの高さは必要ない。書籍などを撮影する場合、本を床に置いて撮影するが、その時には必需品となる。)



(3) モニター用テレビ

ビデオ入力端子の付いたテレビ

被写体が画面の中心に位置するよう確認のため、画面上の中心を示すための糸を張る。

画面の縦横の中心点の位置に黒糸をセロテープで貼る。横はさらに4分割する。(水平位置を判りやすくするため)



(4) ケーブル

個別スイッチ付き6~8個口テーブルタップ
2~3個、デジタルカメラ用AV出力ケーブル、
AV延長ケーブル(1.8~3m)

(5) 撮影用台

W120×D90×H60cm

(6) バックスクリーン

幅140cm、薄いグレー色

(7) 照明機

手製天井吊り用 3~5灯昼白色のスパイラル
蛍光灯、



正面用 2灯、100w/灯

(RIFA-F40×40用ディフューザー)

(8) 脚立

180cm

注

画素数は600画素程度(2592×1944、保存容量約2MB/枚)で充分。

これ以上大きくなれば保存容量を圧迫する。拡大表示しても細部描画も十分に耐えうる。

レンズ径が大きいと画像の端の部分のピントがシャープになる。

画像に歪みがでないように被写体から距離を離し高倍率のズームで撮影。(できるだけ広角では撮影しない。)

スタッフが撮影画像をモニターするため。

背景ホルダーW140×H230cm、背景紙ロールタイプW135×H110cm(代用品でOK。大きいほうがいい。)

個別スイッチ付き6～8個口テーブルタップを使用し、必要に応じて点灯。

三脚を最高丈にした場合に使用。

3. 撮影用小道具

(1) 布生地 (撮影の背景用)

キルト生地、麻生地、ベージュ色、グレー色、濃紺色(生地は光を反射しないもの、色は薄いものと濃いもの)

被写体の色や材質によって背景を替える。

(2) スケール

小型撮影用 15cm三角スケール、大型撮影用
現場記録写真用巻尺80mm×3m

(3) マグネット数字シート

収蔵番号表示用。収蔵品を撮影する時、いっしょに写しこむ。 小、大を用意する。

(4) マグネット数字シート支え

マグネット数字シートを支えるためのもの(割り箸でホッチキスの玉を挟んでいる)。自作。

(5) 文 鎮

1～2個。書籍など開いて撮影する場合、表紙のはねかえりを押さえる。

(6) 刷 毛

埃落とし用

(7) トレーシングペーパー

照明機を覆い、光をやわらかくする、又は被写体の周りを囲み余分な光を分散させるために使用する。

(8) 無反射ガラス アンチニュートンガラス

小型の被写体を撮影する場合、下にできる影を減少させるために使用。床より3～5cmガラスを浮かせて、被写体を置き撮影する。

(9) ダンボール板

大型被写体撮影時に背景などに使用。90×120cm。 5～6枚





4. その他（便利なものグッズ）

目玉クリップ ガムテープ セロテープ タコ糸 ホッチキス はさみ
 カッター 結束バンド（小、中、大） レフ板 重石用の木片



市販の小型スタジオでの撮影



書籍の撮影

5. 撮 影

(1) 撮影スタッフ

最低2人1組でテレビモニターを確認しながら撮影します。

(2) スタジオ

スペースに余裕があればスタジオを常設してください。

被写体は同じ条件下で撮影するのがベストです。撮影用台、照明機（ライティング）、バックスクリーンなど設置して条件が変わらないようにしてください。

(3) 小型スタジオ

スペースに余裕がない場合は、市販の小型スタジオを利用して下さい。

(4) 大型の撮影

移動しにくい大型被写体は単一色の壁もしくは、ダンボール板で四方を囲み背景を単一にし

て撮影します。屋外での撮影は極力自然光を利用します。

(5) ライティング

撮影時において一番神経を使っていたきたいのは、ライティングです。

影は、立体感を出すには必要ですが、被写体と影の境が判別しにくく、収蔵物の輪郭がわかりにくくなります。影は極力押さえたいほうが無難です。実際に写してみても、最良のライティングをつかんで下さい。

(6) オート撮影

オートモードで撮影可能です(フラッシュは使用しない)。

被写体にあたる光量が多ければ問題ありません。暗い場所だと絞りが問題となります。

(7) ズーム

小型の被写体でも接近して撮影することなく、距離をとり、高倍率のズームを使用して撮影して下さい。1倍や2倍のズームで撮影すると歪みが出てきます(縦型の長方形の被写体が台形や丸みをおびた形に見えてきます)。最低でも2mの距離をあけてください(収蔵物を床に置いて撮影することがありますので、三脚は最高丈2mのものを用意してください。ただし、2mの三脚は必需品ではありません。とりあえずはしっかりした三脚があればいいと思います。)

(8) セルフタイマー

手振れ防止のため必ずセルフタイマーを使用してください。

最近のデジタルカメラは10秒以上に2秒も付いており大変便利です。

(9) スケール

小型の被写体は15cm用の三角スケールを使用します。大型の被写体には土木用スケールを使用し、被写体の下方左より又は中央に置きます。目盛1/100を手前にします。

(10) 数字プレート

収蔵番号をマグネット数字シートで作成し、シート支えにセットします。

(11) 被写体

被写体は背景に影が出来ないように、なるべく壁から離します。

撮影者から、数字プレート、スケール、被写体の順に並べます。

数字プレート、スケールは被写体の形によって並列でもかまいません。

将来、図録の作成を念頭に置き数字プレート、スケールが被写体に重ならないように配置してください。(被写体の画像をトリミングした場合数字プレートなどが入らないようにします)

画面の中で、被写体の上下、左右のあき具合(もしくは面積)を見ながら中心を決定します。この時、テレビモニターの糸が役に立ちます。

必要に応じて被写体の正面、側面、背面、上面、底面と数枚撮影します。特に、銘が入っている被写体は銘を撮影します。(上方からの映像が必要な場合、高い三脚や脚立が必要となります。)

小さいものや平面的な被写体(貨幣、ビー玉、おはじき、メンコ類など)は市販の撮影台または、三脚を利用し被写体の真上から撮影します。

場合に応じて、収蔵品を無反射ガラスの上に置き撮影します。この時無反射ガラスは床や机などから3~5cm浮かせます。

書籍類は、歪みが出やすいので三脚を利用し被写体の真上から撮影します。(このとき高くなる三脚や脚立が必要です。)

見開きを撮影する場合は表紙のはねかえりを文鎮などで押さえます。

書物に関しては、表紙・見開き(目次など)・(必要に応じて)最終ページを撮影します。照明で光りやすい被写体(磁器、ガラス類)は、トレーシングペーパーで周囲を覆い、又は、光源から50cm程離れたところにペーパーを垂らし、被写体に光源の反射光が写らないように光を分散させて撮影します。

6.最後に

私たちも、撮影に関しては素人で、試行錯誤の中で写真撮影をしてきました。その中で、重要と思われるのはライティングと画角の中の垂直水平位置のバランスです。

この2点をしっかりとおさえて撮影していただくと、記録として将来に残せる写真になると思います。

難しく考えるよりも、数多く撮影することです。実物はありますので何回でも撮りなおしはできます。

慣れてきますと、4～5時間で、大きな物で10～20点、小さな物で30点以上、書物で40点以上撮影可能です。